

M-GTA 研究会 News letter no.55

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>=====

◇第 57 回定例研究会の報告	・・・	1
【第 1 報告】	・・・	2
【第 2 報告】	・・・	15
【第 3 報告】	・・・	25
◇近況報告	・・・	29
◇編集後記	・・・	31

=====

◇第 57 回定例研究会の報告

【日時】2011 年 5 月 28 日（土） 13：00～18：00

【場所】立教大学（池袋キャンパス）14 号館 3 階、D301 教室

【出席者】

会員<78 名>

相場健一（脳血管研究所介護老人保健施設アルボース）・赤畑 淳（立教大学コミュニティ福祉学部）・浅川 典子（埼玉医科大学）・浅野 正嗣（金城学院大学）・荒関 由美（札幌市立大学大学院）・安藤 晴美（山梨大学大学院）・安藤 里恵（岩手県立大学）・石田 多枝子（海老名市教育委員会）・市江 和子（聖隷クリストファー大学）・今泉 郷子（武蔵野大学）・岩本 操（武蔵野大学）・氏原 恵子（聖隷クリストファー大学）・内野 小百合（埼玉医科大学大学院）・梅原 佳代（国立看護大学校）・ト部 吉文（大橋病院）・大澤 千恵子（淑徳大学）・大島 聖美（お茶の水女子大学）・大矢 英世（東京学芸大学大学院）・小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）・唐田 順子（西武文理大学）・神田 雅貴（川島町教育委員会）・菊地 真実（早稲田大学大学院）・木下 康仁（立教大学）・木村 清美（高崎健康福祉大学）・倉田 貞美（浜松医科大学）・小石 恵美子（大田区立特別養護老人ホーム羽田）・小嶋 章吾（国際医療福祉大学）・後藤 喜美子（国

際医療福祉大学大学院)・佐々木 久美子(東北大学)・佐鹿 孝子(埼玉医科大学)・塩井 厚子(埼玉医科大学国際医療センター)・塩谷 久子(広島国際大学)・塩田 久美子(淑徳大学)・柴 裕子(中京学院大学)・標 美奈子(慶應義塾大学)・鈴木 京子(成蹊大学非常勤講師)・田内 ますみ(神奈川大学大学院)・瀧澤 直子(東海大学医療技術短期大学)・田口 智博(三重大学医学部附属病院)・竹沢 昌子(名桜大学)・田中 満由美(山口大学大学院)・田村 朋子(立教大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学臨床心理センター)・塚越 八重子(高崎健康福祉大学)・辻野 久美子(山口大学)・辻村 真由子(千葉県立保健医療大学)・寺崎 伸一(有)藍穂 ケアプランわたりだ)・都丸 けい子(平成国際大学)・富澤 涼子(国立精神神経医療研究センター)・鳥居 千恵(聖隷クリストファー大学)・鳥海 佳奈枝(神奈川県教育委員会)・中西 啓介(信州大学)・中村 明(東京都立本所工業高等学校)・長山 豊(金沢大学附属病院)・成木 弘子(国立保健医療科学院)・長谷川 雅美(金沢大学)・林 貴子(大阪府立大学大学院)・林葉子(お茶の水大学)・原 理恵(九州看護福祉大学大学院)・久松 信夫(東洋大学大学院)・日野浦 裕子(在宅ケアクリニック川岸町)・福元 公子(首都大学)・保正 友子(立正大学)・堀田 昇吾・牧野 忍(豊橋市役所)・松本 義明(早稲田大学)・三沢 徳枝(創造学園大学)・三井 督子(淑徳大学)・水戸 美津子(自治医科大学看護学部)・宮崎 貴久子(京都大学)・宮本美佐(国立看護大学校)・三輪 久美子(日本女子大学)・盛岡 淳美(札幌市立大学大学院)・山口みほ(日本福祉大学)・山崎浩司(東京大学)・山本麻子(ソフィア訪問看護ステーション東が丘)・山本佐枝子(国立国際医療研究センター)・横山豊治(新潟医療福祉大学)

非会員<23 名>

岩崎香(早稲田大学)・梶原 葉月(Pet Lovers Meeting)・北本 佳子(昭和女子大学)・木村 美也子(東京大学大学院)・浅見 由佳(ルーテル学院大学)・新井 雅(筑波大学)・石川幸男(東洋大学大学院)・上村友希(広島国際大学大学院)・小川里花(ルーテル学院大学大学院)・折田 淳(日本社会事業大学大学院)・寛千佐子(白百合女子大学大学院)・佐藤はるみ(新潟医療福祉大学大学院)・澤岡詩野(財団法人ダイヤ高齢社会研究財団)・鈴木純子(名古屋医専)・田辺有理子(岩手県立大学)・坂東紀代美・日野礼子(武蔵野中央病院)・牧野恵理子(早稲田大学大学院)・三森康雄(愛知県がんセンター愛知病院)・宮良淳子(中京学院大学)・向井秀之(早稲田大学)・横堀ひろ(群馬パース大学)・渡邊真理(札幌市立大学大学院)

1. 総会

定例研究会に先立ち、2011 年度 M-GTA 研究会総会が実施されました。以下巻末に添付したファイルをご参照ください。

「2011 年度 M-GTA 研究会総会資料」

「改正 M-G T A 研究会会則 20110528 承認」

「2011 年度 M-GTA 研究会・共同研究会企画書」

2. 報告

【第1報告：研究発表】

「臨床心理実習のスーパービジョンにおいて、初学者である大学院生を指導するプロセスに関する研究」

丹野ひろみ（桜美林大学臨床心理センター）

本研究における問題の所在と背景

(1) 我が国において有用な SV モデルの確立の必要性

我が国の大学院における初学者教育の「臨床心理実習」の中核は心理面接とそのスーパービジョン(SV)である。しかし、我が国においては、SV 理論を学ぶことも含めスーパーバイザー(SVor)の訓練が十分行われておらず、SVor は自らの SV 体験や心理臨床家としての体験をもとに、SV を行っている場合がほとんどであると考えられる。平木(2009)は日本における心理臨床 SV の現状に触れ、大学院教育に対して提言を行っている。汎用性のある SV モデル、つまり心理臨床の理論・技法における共通因子を強調した SV モデルの確立と大学院における心理臨床 SV に関する実証的研究を積み重ねていく必要があるとしている。

我が国の現状において有用な SV モデルとは、どのようなものであろうか。SV モデルは SV を検討する視点としては認識論であり、SV の方法論でもある。SVor にとって、自らの SV を振り返ることを助け、実際の運用に役立つものとする必要がある。

- ①SVor が SV の全体像を理解できるように包括的である
- ②臨床理論が SVor の役割やスタイルに及ぼす影響を意識しつつ、そのスタイルを活かせる
- ③実際の運用を考え、理論的概念だけではなく SVee に対する具体的な働きかけからなる
- ④「SVee への教育責任」と「CI への治療責任」を果たすために、SVee が初学者であるからこそ起きうる状況における臨床的判断と対処を助けうる

(2) 我が国における実証的研究

我が国における SV に関する実証的研究には大きく 3 つの流れがある。

- ①SVee の体験を対象とした研究(北添 2005、藤沢 2006、田副ら 2008)(黒田、2006)
- ②SVor の体験を対象とした研究(岩田ら 2007)
- ③SV そのものを対象とした研究(児玉 1987、1988、1989、丹野ら 2009)

我が国において SV に関する実証的研究は増えつつあるが、SVor が SV を進めていくために

有用な SV モデルを確立するという点では十分に行われていないのが現状である。

(3) 欧米における SV モデルに関する研究

アメリカでは 1970 年代から、SV モデルに関して盛んに議論が行われ、SVor の訓練に関しても熱心に取り組まれてきた。Bernard & Goodyear(1992)によれば、SV モデルは大きく 3 つに分けられるという。ここで、先ほど述べた我が国において有用な SV モデルに必要と

されることを視点として、これらの SV モデルを検討する。

①心理療法に基づいたモデル(psychotherapy-based model)

SVor は SVor である前に臨床家である。SV が SVor の臨床的立場の影響を受けることは避けがたい。このモデルは影響を覚知することに有用であるが、包括的なモデルとして十分ではない。

②発達モデル

「段階発達モデル」と「ライフ・スパン発達モデル」は、発達段階という横軸と、その段階における発達課題や SVec の特徴といったような構成要素からなる縦軸を有するモデルである。これらのモデルによって、大学院生である SVec の発達段階に関する知見と次の段階へ進むための道筋を知ることができるという点で有用性は高い。「統合的発達モデル」は SVor の介入について言及しているが、介入の戦略といった内容で、実際に介入をするための十分な知見を得ることは難しい。「プロセス発達モデル」は「内省」を SV プロセスにとって重要な要素と位置づけている。「内省」はセルフモニタリングの能力と関連し、臨床家にとっては必須であることから、この能力を育てることに力点を置いた SV モデルは重要と考えられる。

③社会役割モデル

SVor の役割による分類が「弁別モデル」であり、SV 全体を捉えたものではない。「7つの観点モデル(Hawkins&Shohnet, 1989, 2000)」は SVor が SV において焦点をあてる7つの現象を観点としたモデルである。「SAS モデル(Holloway, 1995)」も7つの要素からなる。前者は SVor が SV 全体を俯瞰する観点を提供するにとどまる。後者は「7つの観点モデル」にくらべ、治療的展開や SVec の教育における必要性に応じて、取り扱うことがらを選択しながら実際の SV を進めていくうえで有用である。しかし、「5つの SV 課題」×「5つの SV 機能」からなるマトリックスで示されるように理論的概念を中心として構成されており、具体的な介入との対応関係が十分示されてはならず、「7つの観点モデル」と同様、SVor が SV を実際に運営することを考えると十分とは言えない。

SV の全体を捉えた包括的なモデルという点では、「発達モデル」と「社会役割モデル」が有用と考えられる。「発達モデル」は初学者である SVec について言及しており、「社会役割モデル」は SV の理論的枠組を明瞭に示してくれる。しかし、「プロセス発達モデル」を除いては、「俯瞰的な視線」に基づいたモデルである。SVor が実際の SV を進めていくためには「プロセスの中に身を置く SVor の視線」に基づいたモデルである必要がある。「プロセス発達モデル」はそういった視線に基づいているが、「内省」という SV プロセスの一部についてののみ言及している。

以上のことから、SVor が SV において初学者である大学院生の SVec をどのように指導しているかを明らかにし、それによって得られる SVor の視線にもとづく SV プロセス・モデルを出発点として、我が国において有用な SV モデルを構築していく必要があると考えられる。

1. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を採用した。以下の点から、M-GTA が最適であると考えた。

①スーパービジョン(SV)における、スーパーバイザー(SVor)とスーパーバイジー(SVee)の社会的相互作用をとらえようとしている

②研究しようとしている現象がプロセス的性格を持つ

SVee の心理面接が続いているかぎり、SV という面接は行われる。SV そのものがプロセス的性格を持つ。また、SVor は初学者である大学院生を面接者として育てることにより、面接を展開しC I に対する治療責任を果たそうと、何らかの苦労と工夫をしている。この SVor の体験がプロセス的性格を持つ。

③理論を生成し、実践的活用を目指している

研究によって得られたモデルを検討することによって、初学者である大学院生を面接者として育てていくうえで、よりよい臨床的判断と対処を行うことへの示唆が得られる。

2. 研究テーマ

「臨床心理実習の SV において、初学者である大学院生を指導するプロセスに関する研究」

3. 分析テーマへの絞込み

【構想発表時】研究テーマを「臨床心理実習における SV において、SVor が『初学者を育てること』と『治療責任を果たすこと』を両立させていくプロセス」と設定し、分析テーマが修正されてきたプロセスを報告した。

【構想発表後】「SVにおいて面接者としての力をつけさせようとSVeeを指導していくプロセス」

4. インタビューガイド

(1) 研究協力者の基本的な情報

①臨床経験年数と理論的立場②SV をするときの臨床的立場③SVor としての経験年数と SVor としての学習や訓練④大学院における SV の行われ方

(2) インタビュー項目

①面接を開始するときに伝えること

□SVor としての体験を語るときに葛藤に触れることが起きる可能性があります。話すことが辛くなったときは是非教えてください。話すときは無理をせず、ご自分のペースでお話してください。

□SV の体験を語るときに、SVee やC I さんに関わる情報が出てくるとはと思いますが、個人が特定できないよう、お話しただけのようにお願いします。

②SVor の体験を聞いていく

□SVor の仕事は「初学者である SVee を教え育てること」と「C I に対する治療責任を果た

すこと」であると考えていますか？

□SVor として、2つのことをどのように意識していますか？

□SV を行っていくうえで、どのようなことを大切にしていますか？（具体的な体験に即して）

□SVee を指導するうえで葛藤はありましたか？そのときは、どんな工夫をしていますか？

□面接の成立・中断といった事態に対しては、どのように SV を行いますか？

□SVee の自己課題については、どう扱いますか？（自己課題とは、SVee の個人的な心理的課題であり、面接者としての SVee に影響を与える可能性のあるもの）

5. データの収集法と範囲

(1) データの収集法

1) 面接対象者の設定：「第一種指定大学院において、大学院生の SV を担当した経験がある SVor」

【構想発表時】「C1」に対する治療責任をはっきり意識している SVor（第一種指定大学院）」

2) データの収集手続き

①研究協力依頼書にて、研究協力者を募る。そして、研究倫理遵守に関する誓約書および研究承諾書を送り、あらかじめ目を通してもらう。研究協力者には研究目的をあらかじめ伝えて、具体的な SV 事例を思い出し準備してもらうこととする。

②面接の直前に時間を取り、再度、研究協力依頼書・研究倫理遵守に関する誓約書を用い、研究協力者に対して、研究内容の説明と十分なインフォームドコンセントを行い、その後、「研究承諾書」を交わし、その写しを互いに保管する。

③1回 75 分ほどの半構成的面接を行い、IC レコーダーで記録を行う。

(2) データの範囲の設定

【構想発表時】「SVee の担当する面接の展開に関して何らか苦労したことがあり“打開しよう”という動きをした SVor」

【検討ポイント】面接対象者・データの範囲の設定についての検討

①面接対象者を第1種指定大学院の SVor としたが、1ケースは第2種指定大学院の SVor であったこと②資料中、初学者ではあるが修了生に対する SV に関して語っている部分についての扱い③各大学院における実習システムの違いに関する扱い④SVor の経験年数による違い

16名のSVorを面接対象者とした。12名まで分析を終了し、3名は未分析であり、残り1名のインタビューはこれから試行予定である。すべて女性のSVorである。

	臨床的立場(臨床経験／SV 経験年数)	所属大学院	インタビュー時間・内容の特徴
SVor A	折衷的：自我心理学・動作法(14／7年)	本大学院	(75分)
SVor	スピリチュアル・セラピー(30／2	本大学院	(62分)精神科医

B	年)		
SVor C	折衷的：力動論・学習理論(40／7年)	本大学院	(88 分)
SVor D	フォーカシング志向心理療法(40／7年)	本大学院	(114 分)
SVor E	精神分析的な精神療法(40／4年)	本大学院	(86 分)
SVor F	折衷的：力動論・ユング理論(35／8年)	本大学院	(55 分)
SVor G	折衷的：認知行動療法(16／7年)	本大学院	(90 分)
SVor H	来談者中心療法(27／7年)	本大学院	(80 分)SV における葛藤的な体験についての記述がかなり多い。
SVor I	折衷的：力動論・ユング理論(23／10年)	他大学院	(95 分)第二種大学院であることから、内部実習としての SV は行っていない。特別なケースとしてプレイセラピーの SV をした体験と修了生の SV に関する体験を語っている。
SVor J	折衷的：力動論・認知行動理論(13／3年)	他大学院	(81 分)陪席から始めて、SVee の力量に応じて面接を実際担当する。
SVor K	フォーカシング志向心理療法(23／8年)	本大学院	(79 分)
SVor L	折衷的：力動論・ユング理論(43／8年)	本大学院	(78 分)
SVor M	精神分析的な精神療法・統合的遊戯療法(16／6年)(大学院は1年目)	本大学院と他大学院に同時に勤務	(78 分)米国での SV のワークショップと訓練体験。両大学院での体験を語っているが、他大学院での体験が中心(未分析)
SVor N	来談者中心療法(32／7年)	本大学院	(78 分)
SVor O	来談者中心療法(23／1年)	本大学院	(78 分)(未分析)
SVor	折衷的：認知行動理論(30／7年)	他大学院	(69 分)(未分析)

P			
SVor Q	認知行動療法(10? / 1 年)	本大学院	(これからインタビュー施行予定)

【判断】①SVor I も面接対象者とするために「指定大学院」と修正する②SVor I が修了生について語っている部分は概念の具体例として扱わない③実習システムが違って、それを包括して説明する理論モデルとすることが可能と考え、他大学院の SVor も面接対象者とする④SVor として経験年数が少ない SVor も面接対象者とする。しかし、②のような判断が難しいと考えれば、別の判断としては、SVor I をデータの範囲から外すこともありうる。

6. 分析焦点者の設定：「初学者である大学院生に対してSVを行なうSVor」

7. 分析ワークシート：回収資料1「36面接を体験的学びの場とする」

【検討ポイント】概念生成における“ほどよい距離の感覚”とは何か？

私の傾向として概念を作りすぎる傾向にある。拡散的になる感じが強まったときに分析を一旦置いて結果図作成作業を4回行ってきた。

SVor D までの分析を終えた時点 / SVor G までの分析を終えた時点 / SVor J までの分析を終えて SVor K の分析で新しい概念が出てきた時点 / SVor N までの分析が終わった時点

このように暫定的な結果図があるので、全体像を見失うことはないということもあり、概念を作りすぎる傾向にある。研究者も SVor であり、SVor にとって役立つモデルと考えると、具体的な知恵のようなものを残しておきたいという思いがあるからかもしれない。その結果、具体例と概念の距離が近すぎるのかもしれない。

(1) 概念の生成プロセス 分析ワークシート 理論的メモ欄参照

(2) 分析ワークシート確定作業

①分析ワークシートの内的な整合性に関する作業

分析ワークシートの各具体例が、この概念の具体例であるかどうかを確認。他の概念に移動(あるいはコピー)したり、反対に、他の概念から具体例が移動。その結果、定義について修正の必要があるかの確認し、概念が成立するかの判断を行う

②〈36 面接を体験的な学びの場とする〉はカテゴリーとして成立するのか？

これまでは〈32 履き違えに注意し面接の本質を学ばせる〉と〈29 面接のキャンセル・中断も粘って学ばせる〉という2概念が含まれると考えていた。

【判断】〈36 面接を体験的な学びの場とする〉に属する概念が2つの概念に尽きると思えない。定義の内容を検討し、内容的には統合可能であると判断。

【再検討】〈16bSVee の適切な取り組みレベルに留意〉に関する検討中に「面接者として基本的姿勢」と「面接の基本」と「面接の本質」との異同について〈32 履き違えに注意し面接の本質を学ばせる〉の具体例を再検討。これらの具体例には「体験する」「気づく」側面がないことから、この概念の具体例ではないと判断。むしろ、〈1 面接者として基本的姿勢の問題は見過ぎない〉という概念とともに、「面接者の基礎力をつける」というカテゴリー

が成立するかもしれない。〈29 面接のキャンセル・中断も粘って学ばせる〉の具体例も再度検討。SVor D 以外は他の概念だけの具体例とした。SVor D の具体例は〈29 面接のキャンセル・中断も粘って学ばせる〉だけの具体例とする。具体例が少ないために不成立。〈45 内部実習における時間的制限〉へ移動。

【まとめ】〈36 面接を体験的な学びの場とする〉は独立した概念。そのポイントは「SVee 自身が体験して経験し気づいて学んでいくもの」である。〈36 面接を体験的な学びの場とする〉ために、〈16SVee が学びのペースメーカー〉と考え SV し、〈6SVee の力量に応じて面接をまかせる〉ことなくしては〈36 面接を体験的な学びの場とする〉ことはできない。つまり〈36 面接を体験的な学びの場とする〉ために、〈16SVee が学びのペースメーカー〉と〈6SVee の力量に応じて面接をまかせる〉が両輪のようになり、SV 全体を動かしていくと考えられる。コア概念か。

8. カテゴリー生成：回収資料2 結果図

【検討ポイント】《黒子としての目配り》の生成

〈7 クリティカルな局面で黒子としての目配り〉まさしくリスクマネジメントしている SVor の姿。SVor D の具体例から概念を生成したが、具体例が少なく不成立。カテゴリーで使える？

(1) 〈19 面接イメージと実際の面接を照らし合わせる〉と〈21SV 場面の SVee と面接場面の SVee を照らし合わせる〉の検討

〈19 面接イメージと実際の面接を照らし合わせる〉のポイントは SVor が「面接者としての感覚」を持って、面接の展開を見ていること。〈19 面接者としてケースを見る〉に修正。ケースの展開がうまく行っていないことに注意を払うことに力点がある。〈21SV 場面の SVee と面接場面の SVee を照らし合わせる〉は具体例からは「SV での SVee の様子に問題があるので、面接者としてどうか」、「面接ではやれているが SV で自信がなさそう」「SV で分かったから次はやれるかなと期待するが、面接でうまく動けていないな」と SVee の様子を見ている。〈21 黒子として SVee の力量を見る〉に修正。「SVee の力量」とは「学ぶ力量」と「面接者としての力量」である。この概念の具体例の SVee は〈23SVor 指導の空振り・空回り〉の SVee。「予想と違ってとまどう」ことから〈23SVor 指導の空振り・空回り〉となる最初の兆候と考えられる。

③《黒子としての目配り》とは何か？

「黒子」とは、面接に関して SVee を通じて C I に関わらざるをえない SVor。「目配り」とは、「SV で SVee はどのような様子か」「どのように学んでいるか」、「面接でどのように動いているか」、さらに「面接はどう展開しているか」、問題となる状況はないかと注意を向けることである。実際の状況の評価(振り返り)と予想からなる。他の概念名の中にも「要所をおさえて」「SVee の力量に応じて」「クリティカルな局面で」というように目配りに関連する概念がある。

【まとめ】SVor は「C I を担当する面接者としての感覚(≠黒子)」と「SVee を指導する黒

子としての感覚」を持っている。これを《SVor の二重視線》とする。《SVor の二重視線》はその性質から《黒子としての目配り》の概念でよい。《黒子としての目配り》はコアカテゴリーか。

(2) 《黒子としての目配り》に属する概念は何か？その関連性は？

まず《黒子としての目配り》というカテゴリーの定義をはっきりさせる必要がある！定義は「SVor は SVee を通じて C I に関わらざるをえない「黒子」の SVor は①a「SV で SVee はどのような心理状態か／どのように学んでいるか(学ぶ力量)」①b「面接でどのように動いているか(面接者としての力量)」②「面接はどう展開しているか」といったように、問題となる状況はないかと注意を払い、実際の状況の評価(振り返り)と予想をしている」

【着想】《黒子としての目配り》の定義内容を視点として検討？「SV の時間的経過」を視点として検討？分析テーマの「面接者としての力をつけさせよう」が最も重要な視点！

①「面接者としての力をつけさせよう」を視点した再検討

結果図の下部へのつながりを考えると、SVee とケースに関するアセスメントにもとづき「SVor の指導がうまくいく」ことに尽きる。何をアセスメントするのかにもとづき検討。

②《SVee は大学院生》というカテゴリーを想定していたが、それは妥当なのか？

《実習としてのSV》は不成立と考え《大学院生とのSVがうまくいくための必要条件》に修正

(3) 「面接者の基礎力をつける」の検討

《黒子としての目配り》は何のため？〈1 面接者としての基本的姿勢の問題は見過ぎない〉〈32 履き違えに注意し面接の本質を学ばせる〉を含む「面接者としての基礎力をつける」という SV 方針のためである。現時点では 2 つの概念を含むカテゴリーとする。今後要検討。

【まとめ】《SVor の二重視線》によって捉えられるのは①「SVee の心理状態」②「SVee の力量」(「学ぶ力量」と「面接者としての力量」)③「面接の展開」である。《SVor の二重視線》は〈16SVee が学びのペースメーカー〉と〈6aSVee の力量に応じて面接をまかせる〉に関連していく。《SVor の二重視線》を中心概念とする《黒子としての目配り》はコアカテゴリーと考えてよい。SVor は《黒子としての目配り》しながら、〈16SVee が学びのペースメーカー〉と〈6SVee の力量に応じて面接をまかせる〉が両輪のようになり、〈36 面接を体験的学びの場とする〉ように SV を行っていく。このとき SVor は「面接の基礎力をつけさせる」という方針を持っている。

【木下先生からのフィードバックを受けて再検討】「包括の方向ではなくそぎ落とす判断なのでむずかしいのですが、チャレンジしてみてください。自分の分析結果がどのように応用されるか、応用しやすくなっているかという視点からのチェックも有効です」

《SVの本質構造》と《SVorの二重視線》は理解するためには有用な概念と考えられるが、応用する人にとっては煩雑すぎるかもしれない。《SVorの二重視線》はSVorであれば、自然とそのように見ているし、2つの視線に分けられるものではないと考えた。《SVの本質構造》

も具体例も少ないことから概念としては不成立として、その内容についてはストーリーラインで言及することにするのでよいと判断する。《SVorの二重視線》によってとらえられる〈23SVor指導の空振り・空回り〉がもっとも重要である。また、〈10面接者としての力量を知らされる〉は「よい知らせ」も含み「面接者としての力量」に関する概念である。SVorとして「事の重大さに気づいてあっ!」「予想がはずれてあっ!」「予想がはずれて、よかった!」という体験が起きている。その予想は面接者としての基本的姿勢や自己課題に関してである。この体験に続き、必ず「SVor指導の空振り・空回り」が来るとは限らないが、そうならないように注意すべき第1段階かもしれない。SVeeを指導していくという点では、「予想がはずれて慌てたり困惑しないこと」「SVeeを見るときに思い込み過ぎないこと」が大切である。〈10面接者としての力量を知らされる〉と〈23SVor指導の空振り・空回り〉は《黒子としての目配り》をすることがらと考えられる。《大学院生とのSVがうまくいくための必要条件》の三条件も、そのようなことがらである。

9. 結果図：回収資料3 結果図の上部 修正プロセス

【検討ポイント】結果図が上下に分断されていないだろうか？

上部は、理解の補助線となるように事実確認的な概念として《SVorの現実》《実習としてのSV》に関わる概念がつくられ、その現実に対しての工夫という流れでまとめられてきた。以前の分析テーマでは「SVeeを教え育てること」と「C Iへの治療責任を果たすこと」の両立をポイントとしていたので、SVorの葛藤に焦点があたり、そこに引っ張られたという可能性はないだろうか。

(1) 《SVの現実》と《実習としてのSV》の検討

【着想】分析テーマに照らし合わせると、「どのようなSVorであればよいのか」ということ。

《SVの現実》と《実習としてのSV》に対してSVorは現実主義者(リアリスト)である必要がある。その性質は①SVeeや面接展開については、バランス感覚を持っている。〈28SVeeの成長と変化の限界〉〈35SVeeを見込む〉と〈13面接の中のSVeeとC Iを見守る〉〈15このSVeeとこのC Iの面接と捉える〉②自重を心がけている。〈40面接スタイルの自覚的運用〉〈20SVorの心の整え〉③現実を踏まえつつ最大限できることをする。〈45内部実習における時間的制限〉〈26bエクストラSVの活用〉④独立的であり他と連携し協働しうる。

〈38SV環境があると自覚〉

【着想】《SVの現実》と《実習としてのSV》をカテゴリーと考えてきたが、頭で整理したこと？

【着想】SVeeを指導するためには、SVorには十分な指導力が必要。だから「SVorとしての指導力を減じない・高める」という視点でまとめられる？「SVorの指導の力量不足」と「SV環境があるとの自覚」と「内部実習における時間的限界」と合わせて、「SVの土台への目配り」？

【木下先生からのフィードバックを受けて再検討】

結果図下部との関連性について再検討した。〈38SV環境があると自覚〉〈20SVorの心の整

え)〈45内部実習における時間的限界〉〈17他のSVorとの協働意識〉は具体例を再検討し、不成立。《現実主義者のバランス感覚》はSVeeや面接展開についての概念であり、《16SVeeが学びのペースメーカー》と《6SVeeの力量に応じて面接をまかせる》が両輪のようにうまく前進していくために必要。〈23SVor指導の空振り・空回り〉にならずにすむために必要。〈40面接スタイルの自覚的運用〉は「①SVorの面接スタイルが絶対ではない②SVeeの素質を伸ばすことが大切といった理由で、SVeeに押しつけない」「実習としてのSVであるから、面接スタイルが不十分と考え補ったり、ケースの成立・継続のために修正したりする」これらは《6SVeeの力量に応じて面接をまかせる》に関連する。〈45内部実習における時間的限界〉は不成立とし、代わりに〈29面接のキャンセル・中断も粘って学ばせる〉を復活させる。面接はないもののケースに対するSVを行っている。一方、〈26bエクストラSVの活用〉はケースに対するSVではない。2つの概念は「学びのチャンスを最大限」とし、「面接者としての力をつけさせる」ことに有用である。

【まとめ】SVeeへの働きかけにおいて《SVorは現実主義者》である。〈29面接のキャンセル・中断も粘って学ばせる〉〈26bエクストラSVの活用〉は《学びのチャンスを最大限とする》というカテゴリーの概念とする。SVeeの成長に関する《現実主義者のバランス感覚》とともに、《16SVeeが学びのペースメーカー》であると考えているときのSVorの姿である。〈40面接スタイルの自覚的運用〉とケースの展開に関する《現実主義者のバランス感覚》は《6SVeeの力量に応じて面接をまかせる》ときのSVorの姿である。

10. ストーリーライン：回収資料4 参照

11. 現象特性

SVor は「援助関係を有する2人」を同時に援助している。この構造は、対人援助の専門家を育てるときの「臨床実習」において、普遍的なテーマである。まさしくSVorは「黒子」である。

また、SVは「事後的」であるから「振り返ること」、さらに「事前的」であるから「予想すること」が重要となる。こう考えると、SVorの仕事は危機管理や危機介入の仕事と考えることもできる。SVorは「現実主義者」であり、「目配り」をするというのもうなずける。

12. 理論的メモノートについて

(1)理論的メモノートのつけ方

①暫定的な結果図作成作業を行うときに使った。機能的なノートにする工夫の必要性。

暫定的な結果図の作成作業を行うときに使うことが多かった。関連性のある概念ごとに検討していくのだが、思いつくまま書くので、考えの軌跡を後から読み直せるとしても、機能的なノートではないと思う。さて、どうするか? 「どのような問いに答えようとしているか」作業課題を定め、それを見出しとして作業する。結論が出たものとそうではないものについて、目印をつけ区別する必要がある。〔理論的メモ欄〕についても、同じような工夫は必要だと感ずる。理論的メモ欄に書き込んでいき、その分量が多くなると、理論的メモ欄と具体例との距離が遠くなり、理論的メモ欄の内容を使いづらいつと感じた。具体

例のそばにもメモを書き込む方が作業しやすい感じがしたが…

(2)着想や解釈アイデアについて 概念生成とカテゴリー生成と結果図において、言及

13. 分析を振り返って

①概念の“あそび”の必要性(具体例と概念の距離の問題か)

概念1から始めて、関連性のある概念のまとまりを意識しながら、確定の作業していった。その中で、後から概念が修正されたときに、それまで確定した概念にも影響が出てくる。そのようなことが起きるのは、概念に“あそび”がないせいか。“あそび”があれば、後からなされた概念の修正部分もうまく吸収できるのではないだろうか？

②分析ワークシートの確定作業では理論的メモノートと結果図と分析ワークシートの3つを行き来することで、概念の確からしが増す。

③分析テーマには「限定」の機能もある。研究者の俯瞰的視線に要注意、分析焦点者が重要。

具体例を分析するときは「分析テーマ」をいつも意識しながら作業した。結果図を作成する作業においても何度か「分析テーマ」に戻って検討した。「SVにおいて面接者としての力をつけさせようとSVeeを指導するプロセス」ということは「SVの中で」という限定があるし、「SVorからSVeeへの働きかけ」について見ようとしているという限定がある。また、分析焦点者を意識しないと、研究者の俯瞰的視線で見てしまい、トップダウンの概念の整理になりやすいと感じた。結果図の上部における「迷走」はそこがブレたために起きたのではないか。

④分析ワークシートの確定作業において、他の概念との関連を見ていこうとする動きの中でストーリーラインが出来上がっていくと感じた。

【研究発表の感想と振り返り】

昨年の7月の研究会で構想発表を行い、分析テーマの絞込みについて検討しました。今回はこれまでの分析プロセスを振り返り、理論的飽和に関する判断をどのように行っていくかについて検討したいと思い、研究発表させて頂きました。できるだけ、思考のログをレジュメに記載し、皆さんと検討することを意図しましたが、持ち時間をうまく使えず、皆さんにご迷惑をおかけしたことを深くお詫びしたいと思います。そのような発表でしたが、皆さんのご意見は貴重なものとして、今後の分析に活かしたいと思います。

①分析テーマについて「“面接者としての力”とは何か」「指導するとは何か」との質問が出されました。「“面接者としての力”とはC1を理解することではないか」との意見も出ました。逐語資料を分析するときだけではなく、カテゴリーを生成し結果図を作成するときにも、分析テーマの重要性を実感していたつもりですが、このように問われて、すぐには答えられない自分がいました。実に問題です。SVorには「SVeeを教え育てること」と「C1に利すること」の2つの仕事があります。本研究は「C1を視野に入れつつも、SVorが目目のSVeeを指導するプロセス」に焦点を当てた研究です。つまり、「SVにおいて、SVeeが面接者としてC1を担当していけるように、SVorがSVeeに働きかけていくプロセ

ス」だと考えられます。これについては、さらに言語化する作業をしたいと考えています。

②「分析は緻密だと思うが、得られた結果図は海図のようだ。プロセスのダイナミズムが捉えられていない」「How と What は描かれているが、Why が描かれていない」との意見が出されました。つまり、「M-GTA の本質に関して何らかの履き違いがある」ということだと思いました。

現時点では「“プロセス”とは分析焦点者(SVor)が実際に体験するプロセスであり、理想的な展開としてのプロセスではない」と考えています。つまり、この研究発表の結果図は「理想的な展開」としての結果図だったということです。研究発表後はため息をついていましたが、皆さんの言葉に励まされて、プロセスのダイナミズムを描くことにチャレンジしたいと、今は考えています。このように、研究は試行錯誤していますが、自分で考え判断するからこそ学んでいけると考え、地道に分析をしていきたいと思います。研究発表の機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

【SV コメント】

木下康仁（立教大学）

1. 大学院での「臨床心理実習」においてスーパーヴァイザー（SVor）が学生（SVee）をどのように指導しているかを明らかにしようとする研究で、丹野さんご自身も心理面接で指導を担当されている。問題の所在と背景も的確にまとめられている。
2. 解釈はとても緻密で細部まで徹底している。反面、多くの内容が盛り込まれているため結果図もストーリーラインも複雑になってしまい重要な分析結果がわかりにくくなっている。臨床心理実習という教育的セッティングで SVor と SVee との相互作用がどのようなうごきの特徴として展開するのか、プロセスがわかりやすく提示されていないのだが、説明を聞きながら詳しく見ると起こりうる多くの事柄が捉えられている。できればもっとコンパクトにすっきりと示せると理解しやすいと感じた。
3. この点は事前のやりとりでも助言したのであるが、報告資料でもあまり変わってはいなかった。おそらく丹野さんとしては助言の方向で努力したと思われるので、こうした場合 M-GTA を用いた研究としてどのように考えたらよいかという興味深い問題を提起されたと受け止めた。つまり、自身の中では分析はほとんど終わっていて結果もみえてきている。だが、その表現が複雑なままでの提示となっている。こうしたときに M-GTA の標準形の形にどこまで合わせるべきかという問題である。

当日、結果図とストーリーラインをみての印象として、一種の“海図”のようだと言った。コメントしたのであるが、根幹にあるプロセスは一見わかりにくいとしてもこの研究が対象とする相互作用の全体を示している。しかも、心理実習という明確なセッティ

ングにおける両者の相互作用をとりあげている。そこでの全体図をとらえている。そして、この形式での提示が丹野さんにとって一番しっくりするものであると思われる。

そうすると、原点の確認というか M-GTA の目的とするところが分析結果の実践的活用であり、そのためには分析者にとって一番自分が納得できる表現方法が望ましいことになる。自分が十分に納得できていなければ、他の人に説得的に伝えることはむずかしいからである。また、自分の分析結果がどのように応用されるか、応用しやすくなっているかという視点からのチェックも必要である。結果提示の M-GTA の標準形はそれなりの意味はあるのだが、実践的活用には結果の提示にはその人の強み、得意さを反映してある程度のヴァリエーションがあってもよいと考えられる。

報告を聞いた印象としては、今後時間をおかず論文化まで進み、結果をモデルとして心理実習場面で試してもらいその効果や反応をさらに取り入れていくプロセスを開始するのが適当な時期にきている。

以上

【第2報告：研究発表】

「ソーシャルワーク・スーパービジョンの意義と課題」

浅野正嗣（金城学院大学現代文化学部）

《研究の背景》

ソーシャルワークの理論化の芽生えは1917年にM・リッチモンドが『Social Diagnosis』を著し、ケースワークの体系化を図ることにはじまる。リッチモンドは、適切なスーパービジョンが受けられない場合はセルフ・スーパービジョンが必要であると述べているが（Richmond 1917：349-350）、専門職化がすすむなかでスーパービジョンの重要性は一層認められるようになってきた。日本におけるソーシャルワークは、1987年に「社会福祉士」、1997年には「精神保健福祉士」が国家資格として誕生したことにより大きな弾みがつき、2011年3月現在の登録者数は社会福祉士138,694名、精神保健福祉士49,545名を数えるまでになった¹。近年では日本社会福祉士会や日本精神保健福祉士会、日本介護支援専門員協会など社会福祉領域の職能団体により、領域別或いは問題別にスーパーバイザーを養成する動きが活発化してきている（浅野2011：124-154）²。

このような状況のなかで報告者は、「ソーシャルワーク・スーパービジョンの意義と課題」を研究テーマとして、2009年にM-GTAを用いて分析テーマを「スーパーバイザーの援助者としての自己理解の深化のプロセス」に絞り当研究会で報告した（浅野2010：21-32）。ま

¹ 財団法人社会福祉振興・試験センターの2011年3月報告から。

² 浅野正嗣編（2011）『ソーシャルワーク・スーパービジョン実践入門 職場外スーパービジョンの取り組みから』みらい、pp124-154。

た共同研究者の山口みほ氏は同一の研究データから「職場外個別スーパービジョンを通してスーパーバイザーのソーシャルワーク実践に関する認識変化のプロセス」を分析テーマとして報告した（山口 2011：68-74）。いずれも分析焦点者はソーシャルワーカーであり、データ提供者は職場を離れてスーパービジョンを受けたスーパーバイザーである³。その成果として職場外スーパービジョンにおいて、スーパーバイザーがスーパービジョンを通してソーシャルワーカーとしての自己理解を深めていくプロセスや、スーパービジョンがスーパーバイザーに影響を与えていく経緯を明らかにした。同時にそれらの作業を行うなかで、スーパーバイザーはどのようなプロセスでスーパーバイザーを指導・教育するのかといった新たな研究課題が浮かび上がってきた。

本研究では意識的にスーパービジョンを行っていないくても、日常のソーシャルワーク業務ですでにスーパービジョン機能が発揮されているという実態に照らして⁴、スーパービジョンの同義語として指導・教育という語句を用いるようにした。

（以下、実態に即した行為については「指導・教育」と記し、その枠組や意味内容を中心に述べる場合には「スーパービジョン」という用語を用いる。）

《研究の目的》

本研究の目的は、日常のソーシャルワーク業務のなかで上司や先輩など指導的立場にあるソーシャルワーカーがスタッフに対して、どのように指導・教育をしていくのか、そのプロセスを明らかにすることである。

1. なぜ M-GTA を活用し、他の研究方法を活用しなかったのか（方法論選択の適切さ）

職場の上司や先輩が行なっているスタッフのソーシャルワーカーに対する指導・教育（スーパービジョン）は、そのプロセスとして次のような特性があると考えられる。

- ①スーパービジョンはスーパーバイザーとスーパーバイザーの両者のやり取りを通して行われる。（社会的相互関係性）
- ②スーパービジョンは援助技法に特化して単発で行われる場合もあるが、ソーシャルワーカーの成長や専門職としての資質の向上を目指した継続的学習法の1つである。（継続性）
- ③スーパーバイザーは、スーパーバイザーである援助者がクライアントに提供するソーシャルワーク実践（社会福祉サービス）に焦点をあてた指導・教育を行う。（ヒューマンサービス領域）

³ 「ソーシャルワーク・サポートセンター名古屋」は2006年より3名のスーパーバイザーがソーシャルワーカーを対象に職場外においてソーシャルワーク・スーパービジョンを実施している。

⁴ 窪田暁子（1997）「福祉実践におけるスーパービジョンの課題」，福山和女・高橋好美・福田進・松原良子「座談会 福祉のスーパービジョンをどのようにとらえ直すか」『月刊福祉』8月号，社会福祉法人全国社会福祉協議会，pp14-21，pp22-35。

④スーパービジョンの展開は原則として一定の過程を経て行われる。(プロセス性)

〈他の研究方法との関連〉

スーパービジョンとは何かという問いかけは今日でもソーシャルワーク領域の重要な課題の1つである。1つの事象の構成要素を明らかにする研究法としてはKJ法を用いることが有効と考える。またその事象による効果と評価をあらわすことを目的とした研究には、シングル・システム・デザインや事例研究法が有効といえる。1つの事象を分解してその構成要素を明らかにすることや、原理や効果など普遍的なものを追及することの意味は大きい。同時に、その事象が人と人との相互作用の上に成立する場合、「特定の目的的な文脈で関係付けられている」(木下 2003: 90) という側面は見逃すことができない。そのような道筋をつけることは実践場面においては不可欠であり、スーパービジョン実践の重要な羅針盤の役割を担うものであり、文脈を明確にすることは、前述した問いかけを紐解く重要なツールになる。

以上のような観点に加えて、本研究が先の研究の延長線上にあることや、同一研究手法を用いることでスーパービジョン方法論として対比的且つ包括的に検討することができることなどから、研究方法としてM-G-T-A (実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ) を採用した。

2. 研究テーマ

ソーシャルワーク・スーパービジョンの意義と課題

3. 分析焦点者の設定

職場で指導的立場にあるソーシャルワーカー

4. データの収集法と範囲

1) 対象の限定

- ①MSWとして10年以上の経験があること
- ②職制として係長(主任)以上の管理職にあること
- ③職場(組織)内にソーシャルワーカーのスタッフ(部下)が配置されていること
- ④報告者が講師を務めたソーシャルワーク・スーパービジョンに関する研修会や研究会に参加経験があること

2) データ提供者

同一職場のソーシャルワーカーのスタッフに対して指導的立場にある4名のソーシャルワーカー

3) インタビュー項目

インタビューは、半構造的面接で行い以下の項目を聞き取りの目安とした。

- ①指導・教育をどのように開始しているのか
- ②扱う検討課題はどのようにして決めるのか
- ③どのような方法で指導・教育をしているのか
- ④指導・教育の終結は、どのようにするのか
- ⑤指導・教育するときに留意していること

(インタビューでは調査協力者の話の流れを尊重する中で進めるようにし、スタッフの指導・教育をどのように行っているかその展開プロセスを聞くことを心がけた。)

4)調査期間

2010年10月～11月

5. 3つのインターラクティブ性のうち、1つ目と3つ目に関する具体的内容と考え

1) 1つ目(データ収集段階のインターラクティブ性)

〈報告者(研究者)とデータ提供者との関係について〉

4名のデータ提供者は、報告者と同様に保健医療領域でソーシャルワークを実践しており、研究会などでも顔を合わせるなど同一職能集団に所属する同業者である。

〈語られた内容〉

聞き取り調査をはじめるとあって、分析テーマを「職場内で指導的立場のソーシャルワーカーが、スタッフのソーシャルワーカーに対して指導・教育するプロセス」と設定したように、具体的で限定的な指導・教育そのものが語られると想定していた。しかし、その内容は狭義の「指導・教育」に限定されたものではなく、指導的立場のソーシャルワーカーの職務としての幅広い付帯業務(自身のソーシャルワーク実践及び人事管理、組織構造の急激な変化への対応等)に切迫されているものであった。指導的立場のソーシャルワーカーは、そのような状況のなかで特別にスーパービジョンという意識はしていないものの、職場にあったソーシャルワーク業務の枠組みを作る中であらためてスーパービジョンの必要性を実感しているものであった。

〈観察したこと〉

第1には〈語られた内容〉に示したように、狭義の指導・教育を超えたさまざまな環境的要因が密接に関係していること。指導的立場のソーシャルワーカーによるスタッフの指導・教育は、日常的な行為(業務行動)の中で行われていること。言い換えれば指導・教育が日常業務に溶け込んでいるか、溶け込ませようとしていることなどが感じられた。

その反面、日常業務のなかで新たなスーパービジョンという枠組みを構築しようという姿勢にも繋がっているようである。第2には、報告者はインタビュー時に上述したような幅広い付帯業務の多さに対して少なからぬ動揺と困惑を感じ、インタビューの方向性に苦慮したが、データ提供者の語る事実をそのまま受け止める姿勢をできるだけ堅持するようにした。

2) 3つ目（データ分析結果の応用段階のインターラクティブ性）

研究の成果は、職場内で指導的立場のソーシャルワーカーが、日常業務におけるスーパービジョン機能を業務の一部として明確に位置づけ、計画的にスタッフのソーシャルワーカーを育成する方法として修正しつつ活用することを望んでいる。また、今回の成果が前回の分析テーマ「スーパーバイザーの援助者としての自己理解の深化のプロセス」と連動して、研究テーマ「ソーシャルワーク・スーパービジョンの意義と課題」を深めるものとなることを期待している。今後の研究課題として「職場外スーパービジョンにおいてスーパーバイザーがスーパーバイザーを指導・教育するプロセスの研究」をはじめ「職場外スーパービジョンと職場内スーパービジョンの機能と限界」、「スーパービジョンと生涯教育」といった新たな問いを立て、ソーシャルワーク・スーパービジョン方法論の確立に資することを通してソーシャルワーカーの資質の向上を図る一助としたい。

6. 分析テーマへの絞り込み

「職場内で指導的立場のソーシャルワーカーがスタッフのソーシャルワーカーに対して指導・教育するプロセス」

報告者は2009年に「スーパーバイザーのソーシャルワーカーとしての自己理解の深化のプロセス」について報告した。その結果、スーパービジョン実践を促進するためには、スーパーバイザーのスーパービジョンにおける展開過程に加えて、スーパーバイザーの側から見たスーパービジョンのプロセスを明らかにする必要があると考えるに至った。そこで今回の研究は、スーパービジョン機能がすでに身近で発揮されていると言われている点と、日常的なスーパービジョンの普及を目指したいという2点から、職場内のスーパーバイザーがどのようにソーシャルワーク・スーパービジョンを展開しているのかという点に焦点をあてた。

7. 現象特性

「子を“育てる”」

親は、子どもが生まれた直後は、子どもに対して衣食住など100%依存させる関係のなかで子どもを育てる。幼児期には、子どもの成長にあわせて親が手本を見せて子どもに真似をさせるなどして、良いことと悪いことなど生活を送る上で最低限必要なルールを少しずつ教えていく。児童期の前後からは、さらに社会的規範親を具体的に教えながら、自分で考えて行動するように指導する。思春期になると、子どもは自我の確立とともに次第に自分の考えを持つようになり親に反抗するなどして、徐々に親から離れていくようになる。やがて子どもは青年期を過ぎて大人の仲間入りをするようになり独り立ちするようになる。親はそのようにして我が子を育てていく。

8. 結果図とストーリーライン

・結果図（別紙参照）

職場内で指導的立場のソーシャルワーカー（以下、指導者）が、スタッフのソーシャルワーカー（以下、スタッフ）に指導・教育するプロセスは、まず新人スタッフに対して実地訓練として短期間集中的に行う「1. 集中的実地訓練による指導」や、相談面接に立ち会わせて記録の書き方や読み解き方を指導したりする「2. 記録の手ほどき」を交互に行う【初期密着型指導】からはじまる。そのような初期の指導は次第にスタッフを相談面接に同席させて「3. 見せて教える」ことや、その都度行われる「4. 見方や考え方の提示」といった指導方法が連関しながら【懇切な実践的指導】が行われる。また【初期密着型指導】はスタッフの「5. 動機づけの促進」や「6. 思いを汲み取る」「7. 求めに応じ」といったソーシャルワーカー個々の心情に着目し、それぞれのニーズに沿った指導をする【個別ニーズへの対応】へと推移していく。指導者はこの実践的指導によってスタッフの「8. 気づき場面の立ち会い」に行き合うことになり、その後の指導にあたって「9. 気づきの深化の促進」を図るようになる。指導者による初期の直接的指導は、次第にスタッフ自身の力を引き出す方向へと向かっていく。このような指導者のスタッフに対する指導は、スタッフへの《依存から自立への同道》の過程といえるが、その過程はスタッフばかりでなく指導者自身や他のスタッフにとっても相談業務のふり返り作業となり「10. 終わりはない」と考えられている。

また、指導者によるスタッフの指導・教育は、職場の体制に大きく左右される。多忙な業務のなかで組織体制の変化に合わせた指導体制が必要になるが、指導者は時間不足に悩まされる。

そのため指導者は「16. 個別指導の時間確保」の方法を考えるようになり、朝・夕に行われる「17. 申し送り時の短時間指導」や「18. 合間を縫う指導」を行うなどして《時間の意識化》に留意するようになる。そして指導者は「11. 事例検討の場の確保」に腐心し、事例検討を行うべく「12. 検討資料の作成指示」を出す。事例検討を行う場合に指導者は一方的に指導するという方法ではなく、「13. 双方向の事例検討」として指導者とスタッフがあるいはスタッフ同士が相互に意見交換しながら互いに学びあう姿勢を取るようにしている。だが時間的制約のため、他の業務や食事をしながらというように、何かをしながらの「14. ついでの意見交換会の試み」をする。このように指導者とスタッフは、開かれた関係の上で事例検討を行うが、指導者はスタッフの期待に応える形で事例検討の最後には「15. 締め括りの役目」を担うなどして《事例検討の推進》を図っている。

このような《時間の意識化》や《事例検討の推進》は「19. 適切な人員配置の切望」となり、「20. システマティックな指導体制作り」や「21. チーム制の導入」などに取り組むようになる。反面、指導者は自分の「22. スーパービジョン技術不足の自覚」か

ら、更なる《組織的指導体制の構築》を希求するようになる。

9. カテゴリー（もっともアピールしたい1カテゴリー）

分析結果として22個の概念と、4個のサブカテゴリー、4個のカテゴリーを抽出した。

コアカテゴリー：《依存から自立への同道》

10. 分析ワークシート（もっとも自分がアピールしたい1概念のみ）

「8. 求めに呼応」（別紙参照）

11. 分析を振り返って

- 1) 聞き取り調査の段階で、スーパービジョンを実施するということは予想以上に組織との関係が大きいということに意識が奪われて、プロセスから離れた聞き取りや解釈になっていったのではないかという不安がある。
- 2) できるだけ「プロセス性」を見るように留意したものの、その実感に乏しい。
- 3) 予想外であった「終わりはない」というインビボ概念は、結果図のなかの位置づけや整理の仕方で良いのか検討が必要。
- 4) 4名のソーシャルワーカーの聞き取りから得られた結果をもとに、より「プロセス性」に焦点化した新たな聞き取りを実施することが望ましいか検討が必要。
- 5) 概念生成にいたる理論的飽和化の作業を丁寧に行うようにする。

【主な質問と意見】

- 1) データ収集の範囲と方法について、MSWとして10年以上の経験とあるがその基準は何か？
- 2) 職制として係長以上の管理職にあるということは中間管理職的なもので上と下で板挟みになることはないのか？
- 3) 報告者が講師を務めたソーシャルワーク・スーパービジョンに関する研修会や研究会に参加経験があることとあるが、それはなぜか？
- 4) データ提供者が4名という理由はなにか？今後増やすことを考えているのか？
- 5) 分析テーマはインタビューガイドをふまえた上でデータと向き合って修正していくと思うが、そういった変化はどのようなものであったか？
- 6) 業務のなかで無意識に行われているスーパービジョンは、構造化されたスーパービジョンとはプロセスが違っているという考えがあったか？
- 7) 構造化されたフォーマルなスーパービジョンと、日常の業務の合間に行うようなインフォーマルなスーパービジョンがあって、インフォーマルなスーパービジョンに中心的に関心があるということか？ 分析テーマが少し広すぎるように思われる。

8) 初任者に対する指導・教育なのか。現象特性も比喩的な表現ではなくもっと抽象化された動きだけを凝縮したとらえ方のほうが良いのではないか。また指導・教育するプロセスというのが広いので、何を誰がどこまでというのが分からない。

9) 現象特性は「子育て」とは違うことがあるので、重なるところと違うところの違うところを取る。比喩との比較から共通部分が何で、差異が何か、その共通部分の動きがエッセンスで、文脈が変わってもこれはみられるということがエッセンスである。

10) このデータならではのというカテゴリーはどこになるのか？ カテゴリーでは《依存から自立への同行》ということで、概念は「求めに呼応」となっている。

11) 結果図とストーリーラインからみて何がどのように展開しているのかはよく分かるが、なぜこういう展開になるのか、分析焦点者が相互作用を通してどのように認識を変えて、あるいは変えずにこういう選択をしてこういう行為をとったのか。What と How の部分は非常によくわかるが、Why が見えてこない。なぜそうしてしまうのかというところが指摘できて、その結果を本人に返したときに「言われてみれば、そう」というように、意識の奥にあったところが整理されると結果に対する理解も上がるし、どういうふうに自分が利用していったらよいのかというアイデアにつながっていく。

12) このデータから読み取れる新しい点は、《組織的指導体制の構築》の必要性を見つけたことではないか。なにが Why かというと時間がなかったり、終わりが無いということで、終わりが無いプロセスとはどういうことかを考えると、終わりが無いとか時間的余裕がないとかいうことを意識化しなければならないがそれは難しいという結論を4人がもっていて、それを明らかにする次につなげていくという意味でこのデータは良いデータではないか。スーパービジョンというのは初心者であろうがベテランであろうが「二人羽織」のようしてやっていかないといけない職業なのかと思った。感覚的には、終わりがなくいつも二人羽織でやっていく必要があるということが考えにあって、そこに何を新しい風を入れるかという、それは二人羽織的なのを組織的にやることで常にスーパービジョンというわざわざとった時間ではなく、日常のなかでどうやってスーパーバイズしていくかという方法論も提示できれば時間も節約できるしスーパーバイズが日常的にできるということを証明できるのではないか。そういう可能性はあるか？

13) 「11. 事例検討の場の確保」「16. 個別指導の時間の確保」はもう少し飽和化ができるのではないか。「12. 検討資料の作成提示」と「2. 記録の手ほどき」、「15. 締め括りの役割」と「10. 終わらない」の飽和化もできるのではないか。また先輩後輩の直接的指導・教育と、その条件整備の《組織的指導体制の構築》までを含めて今回の分析テーマとするのか、スーパーバイザーとスーパーバイジーの直接的な関係の部分明らかにしようとするのか、などを考えると分析テーマをもっと絞ってもよいのではないか。

【感想】

今回の発表に際して、日頃 M-GTA のスーパービジョンをお願いしている小嶋章吾先生から分析テーマをより具体的に表記することや、概念にプロセス性の乏しいものがあることから概念の飽和化の完成度の高めるように指摘を受け、ワークシートの見直しを行いました。また発表時のスーパーバイザーである山崎浩司先生からは事前に 2 度にわたる指導をいただきました。1 度目は主に「先行研究の読み込み」と「ストーリーラインの記述について」でした。先行研究の読み込みは『GTA の実践』（2003 年）、『ライブ講義 M-GTA』（2007 年）、『死のアウェアネス理論と看護』（1998 年）の 3 冊を精読するという助言でした。以前に通読はしたものの大半の記憶は忘却の彼方にあり、学び直しをする良い機会となりましたが、理解の密度にばらつきがあることを実感しました。ストーリーラインについては、カテゴリーとサブカテゴリー、概念のすべてを織り込んだ文章を作成し、更にストーリーラインと結果図がきちんと対応関係にあるようにして A4 1 枚以内の長さで記述するということでした。質的研究の特徴のひとつである「読み手に分かりやすく、丁寧で説得力のある記述を心がける」ようにするという指導がすでに始まっていると感じました。

2 度目は、「報告する項目の順序の変更」と「現象特性の考え方や記述の仕方」、「ストーリーラインの簡易版の作成」などについて提案をいただきました。報告する項目の順序が変わることは、当初簡単に考えていましたが、実際に作業をしてみると項目の順序を変えることで、それぞれの項目に対する視点の重みづけに変化があることを感じました。山崎先生からは、発表がしやすくなることと、参加者が議論しやすいようにというコメントを頂いていましたが、報告者の私の視点が変化についても予測しておられたのではないかと思います。

現象特性の考え方や記述の仕方は、これまでも木下先生が「簡単なようでなかなか理解されにくい」と指摘されていますが、文献などを再読するものの、難しい、というのが率直な感想です。またストーリーラインの簡易版を作成することは未経験でしたが、作成してみると纏っていた思考回路が整理されていくような感覚を味わいました。

「分析テーマの考え方とその範囲」、「研究者の関心」、「現象特性のとらえ方」、「What・How・Why の明確化」、「概念の飽和化」などご指摘いただいた点について今後データを読み直す作業を通して熟成させていきたいと思います。

山崎先生をはじめ小嶋先生や会員の皆様から多くのご意見をいただきましたことを深く感謝申し上げますとともに、木下先生より発表後に幾多の貴重なご指摘をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。今後とも皆様のご指導をいただきますようお願い申し上げます。

【SV コメント】

山崎浩司（東京大学）

今回の浅野先生の研究は、「ソーシャルワーク・スーパービジョンの意義と課題」という研究テーマを大枠として、これまで「スーパーバイザーの援助者としての自己理解の深化のプロセス」、「職場外個別スーパービジョンを通じたスーパーバイザーのソーシャルワーク実践に関する認識変化のプロセス」という分析テーマで、それぞれ領域密着理論を生成してきた2つの研究に続くものです。

その目的は、「日常のソーシャルワーク業務のなかで、上司や先輩など指導的立場にあるソーシャルワーカーが、スタッフに対してどのように指導・教育（≡スーパーバイズ）していくのか、そのプロセスを明らかにすること」でした。この目的のもとに、分析テーマは、「職場内で指導的立場のソーシャルワーカーが、スタッフのソーシャルワーカーに対して指導・教育するプロセス」という形になったようです。

この分析テーマを読んだ時に最初に浮かんだ疑問は、「この分析テーマは、いつこの形に落ち着いたのだろうか？」というものでした。ご存知のように、M-GTAにおける分析テーマは、データ分析の比較的初期段階でやっと確定してきます。最初は、先行研究レビューやインタビュー項目の吟味を踏まえて分析テーマを設定しますが、データ収集を経て分析する段階に至っては、データ自身のもつ特性に合わせて分析テーマを修正していくことになります。これは言うまでもなく、グラウンデッド・セオリーを生み出そうとする M-GTA では、グラウンデッド・オン・データ（データに根差すこと）が原則であるからです。

分析テーマがデータと向き合ってからでも変化しない場合、次の3つの可能性が考えられると私は思います——①グラウンデッド・オン・データの原則を無視した、②最初に設定した分析テーマが、データの特性をはじめから適切に内包していたので修正しなかった、③最初に設定した分析テーマがかなり大きかったため、データの特性がどんなものであれ、修正の必要性を感じられなかった。

浅野先生の分析テーマについて私が考えたのは、③の可能性でした。分析テーマが大きすぎると、結果として描き出そうとする現象もとても大きなものになり、読者／結果の応用者が覚えていられるような大きさを超えて複雑なものになりかねません。また、今回注目している領域（ソーシャルワークにおけるスーパービジョン≡指導・教育）ならではの概念を生成する意識を高くもつためにも、分析テーマをはじめから大きく設定しすぎるのは上策ではないように思います。（かと言って、小さく設定しすぎるのも問題ですが。）

次に、現象特性ですが、これは、明らかにしようとしている現象に特有な文脈を取り除いたときに残るエッセンスです。M-GTAの場合、明らかにしようとしている現象には必ずプロセス性（動き）があるので、結局現象特性とは、その現象および類似の現象にも存在する「動き」のエッセンス（＝共通する本質部分）を指します。このエッセンスを考えるために、私は「近い比較」と「遠い比較」を行い、比較を経て見出される部分を定めます。

今回の浅野先生の研究ですと、「ソーシャルワークにおけるスーパービジョン」が注目している現象なわけですが、「近い比較」の例としては、「新人看護師の指導・教育」、「心理臨床におけるスーパービジョン」、「M-GTAにおけるスーパービジョン」などに対比させ、そ

れらに重なる部分と異なる部分を考えられます。遠い比較の例としては、浅野先生が提示されたように、「子育て」であるとか、または「企業における OJT」、「先輩僧侶による新弟子に対する修行指導」などと照らし合わせ、それらに重なる部分と異なる部分を考えられます。以上一連の比較をとおして浮かび上がってくる共通部分が現象特性なわけです。

ただ、注意していただきたいのは、現象特性の検討は、あくまでも今回の領域に密着したプロセス性のある理論を生み出すための参考として行うのであり、それ自体を明らかにするのが目的ではありません。つまり、自分のデータからグラウンデッド・オン・データの原則にのっとって生成する理論は、やはり「このデータならではの」という特徴が十分に現れる領域密着理論でなければなりません。この特徴が、今回浅野先生が提示された結果図およびストーリーラインには、十分に現れなかったように思います。

もう一つ結果図やストーリーラインについて言うと、何（WHAT）がどのように（HOW）展開するのかは割とわかるのですが、なぜ（WHY）そのように展開するのかがあまりよくわかりません。この WHY の部分は、往々にして対象者ご本人たち自身が、明確に意識していなかったりすることですが、だからこそそれが分析者の緻密な解釈によって明らかにされたとき、それは分析者にとっても対象者や結果の応用者にとっても、大きな気づきへとつながります。質的研究の醍醐味の一つは、こうした本人たちさえ明確に意識していない部分を浮かび上がらせるところにあると私は考えます。

浅野先生の今回の研究でも、この WHY の部分がもう少し描き出されてくると、いま以上に興味深く意義深い結果となるのではないかと思います。ご研究のますますのご発展をお祈りしております。

【第3報告：構想発表】

「産科医療施設に勤務する看護職者の「気になる親子」に対する「気づき」から「連携」へのプロセス—周産期からの児童虐待予防を目指して—」

唐田順子（西武文理大学 看護学部）

1. 目的

本研究は産科医療施設に勤務する看護職者が、「気になる親子」に気づき保健機関等につなげるという連携のプロセスを明らかにすることである。本研究での児童虐待とは乳幼児の虐待を指し、その予防のための連携のプロセスについて検討する。すでに虐待が起きている事例における研究ではない。あくまで、児童虐待防止対策の第1段階である発生予防に向けた取り組みである。発生予防の段階は、看護職としては最も力の発揮できる段階だといえ、この段階に取り組む意義は大きいといえる。

2. 用語の定義

「気になる親子」：現在のところ明らかな虐待や、疑いをもつような所見はないが、親子の

様子で気になる点がある状態。具体的には、虐待につながりやすいハイリスクな要因がある親子、親子関係などに何らかの不自然な様子が感じられる親子、育児不安が強い親子、サポートが少なく孤立した育児に陥りやすい親子等をさす。(東京都「医療機関のための子育て支援ハンドブック～気になる親子に出会ったら～」を参考に定義)

「産科医療施設に勤務する看護職者」：看護師、助産師

3. M-GTAに適した研究であるか

連携という行為は、人と人、組織と組織が何らかの相互作用を持ち、行われているものである。看護職者が、「気になる親子」にどう気づき、それを「つなげる」に至るまでにどのような行動や判断を伴って決断されるのか、そのプロセス性および、看護職者と対象の親子、看護職者と周囲の医療・保健・福祉職者の相互作用性の要素が強く、M-GTAに適しているといえる。そして、M-GTAが実践的活用を促す理論である特性を活用し、産科医療施設に勤務する看護職者の連携のプロセスが明らかになれば、産科医療施設という特性に合った連携推進のための実践モデルの基礎資料になりうると考える。

4. 研究テーマ

産科医療施設に勤務する看護職者の「気になる親子」に対する「気づき」から、「連携」へのプロセス

5. 分析テーマへの絞り込み

産科医療施設に勤務する看護職者（看護師・助産師）は、どのように「気になる親子」気づき、それを判断し、どのようにして保健機関等に連絡しているのだろうか。

6. データの収集法と範囲

1) データの収集方法

産科医療施設に勤務する「気になる親子」を支援した経験を持つ看護職者に対して、個別に半構造化面接インタビューによりデータを収集する。上記のインタビューガイドを予め示したうえで、自由に話を聞く予定である。

2) データの範囲

調査対象者は、産科医療機関に勤務する「気になる親子」を保健機関等へ連携した経験を持つ、産科経験年数3年以上の看護職者（助産師、看護師）で、施設の看護管理者の推薦を受けた人。

先行研究では、先駆的な取り組みを行っている産科医療機関において虐待予防のイニシアティブをとっていたのは助産師であったことが報告されているが（栗原他, 2010）、産科医療機関によっては、助産師だけが援助にあたっているわけではない。連携を推進してい

るのが看護師である場合もあるため、研究対象を看護職者（看護師、助産師）とした。

データは、①産科診療所・病院に勤務する看護職者の語り。②総合病院産科（産婦人科）病棟に勤務する看護職者の語り。③周産期母子医療センター産科病棟に勤務する看護職者の語りとし、3施設でそれぞれ7・8名ずつ程度収集する予定。

文献：省略

SV 林先生からの質問・ご意見

- ・インタビュー対象者の選択と依頼をどうするのか。
- ・方法論限定について、データの範囲や分析焦点者を、診療所・病院、総合病院、周産期母子医療センターの3つに区分する理由を発表資料の述べている内容から、更に具体的に追加説明をしてほしい。

フロアからの主な質問・ご意見

- ・「気になる親子」といっても、染色体異常に関連する先天性疾患の事例と、健康な親子の事例等、それぞれの持つ問題は違うので、「気になる親子」をもっと絞った方がよいのではないか。
- ・「連携」とは、どのようなことを指すのか。行政を巻き込んだシステムづくりのようなものを考えているのか。
- ・「気になる親子」に気づいてから、つなげるまでにはいろいろなプロセスがあると思うが、例えば誰かに相談する等。それをどう考えているか。
- ・インタビューガイドに、最も印象に残った「気になる親子」のケースを想起してとあるが、初めて経験した事例の方が印象に残っており、重要ではないか。
- ・インタビューの対象者が、看護職者で産科経験3年以上とされているが、経験年数が3年以上の看護職者でもさまざまな看護職者がいるので、どういう看護職者に話を聞いて分析しようと思うのか、分析焦点者を絞り込むといいのではないか。
- ・分析焦点者の部分に、「気になる親子を保健機関等へ連携した経験を持つ・・・看護職者」と表現されているが、個人が外部の機関に連携するということはあるのではないかと思うが、その部分はどこで捉えられているのか。
- ・「気になる親子」にはさまざまな要因があり、いろいろな親子がいる。焦点を絞るのも一つの方法ではないかと思う。この研究には、「気づきのプロセス」と「どのように行動かするのか」の2つが含まれているように考えるが、分析テーマを分けた方がいいのではないか。

木下先生よりコメント

肝心のところがよく分からない。周産期からの児童虐待予防がどの程度重要なのか分からない。産まれてくる子どもとの関係なのか。妊娠期から産後は1週間くらいの期間で、その間に何に気づけるのか、どういう場合を想定しているのか、助産師はその期間にどういう課題を立てているのか。先行研究のレビューが不足しているのではないのか。産科以外の看護職者は何を「気になる」としているのか、そこでは何が分かっているのか。文献をレビューすれば、こういった関心なのか、どういう位置づけなのかははっきりしてくる。自分の疑問・根本的にやろうとしていることをはっきりさせることが重要である。分析焦点者の判断は、今は答えを出す必要はない。自分の問題を見つめなおすこと、そうすればおのずと決まる。

SV林先生よりコメント

児童虐待については、社会学や教育学等多くの分野で研究されている。他分野の文献をレビューし、「気になる親子」とはについてもっと考えてみる必要があるのではないのか。また分析焦点者についても、実現可能性という方向からも検討が必要ではないのか。

発表を終えての感想

今回、M-GTA 研究会で発表の機会を頂けたことを感謝いたします。

初めて M-GTA に取り組むことを決め、研究計画を進めてきました。この段階で発表を聞いていただき多くの方のご意見を頂けたことは、とても意義深いことでした。

SV の林先生からは、暖かな励ましと、適切なご助言を頂きました。感謝いたします。「気になる親子」について話を聞く看護職者がどのような定義をしているのかを、まず聞く必要があるのではないかと助言いただき、基本的であり重要なことを気づかされました。また、自分が回答者になったつもりでインタビューガイドを見直すと、深く聞き取れる質問がでてくるとの助言もいただきましたが、これについてはまだまだ検討中です。

フロアからは多くの方から、「気になる親子」の定義に関するご質問をいただきました。現在の定義では伝わりにくい概念であることを痛感しました。また、この研究の意義を十分説明できていないご指摘を頂き、それが文献レビューの不足からくるもののご指摘も真摯に受け止め、その点を克服できるように頑張っていきたいと思います。その点を十分言語化する努力をしながら、再度「気になる親子」についての定義も考えてみたいと思います。発表終了後の自由な質疑応答の時間で、具体的な事例を挙げ、この研究の重要性につて応援いただきました先生に、この場を借りて感謝申し上げます。

「連携」についても多くの質問を受けました。タイトルや最終的な目的としていた、連携推進のためのモデル等の文言の与える印象が、さまざまに受け取られることが分かりました。自分の中では、産科医療施設内での気づきから、それを判断し、他機関へ連携をとるまでのプロセスを明らかにしたいのだと、改めて気づかされました。これから、研究テ

ーマも再考していこうと思っています。

分析焦点者についても単に経験年数だけでなく、どのような看護職者に話を聞きたいのかを、再度よく考えて設定していきたいと考えています。

林先生、木下先生、陰で応援して下さった市江先生、発表を聞いてくださりご意見を頂いた皆様に感謝いたします。

【SV コメント】

林 葉子（お茶の水大学）

研究テーマは、大変興味深く、今後、児童虐待の早期発見のためには、有意義な研究だと思っています。現代の家族が個人化し、家族員個々人の自己実現と、子育ての狭間で、育児ノイローゼになる女性はこれから増加してくるのではないかと予想させるからです。相談する家族がいなくて、周産期に、すでに、不安をかかえている女性もいるのではないかと思います。今の若い家族は相談相手を探すことすらできないかもしれません。そのようなときに、看護師という専門家から、声をかけてもらえれば、素直に相談してくれる可能性もあるのではないのでしょうか？

そのためにも、どのような親子を“気にすればよいのか”という「気になる親子」の定義も含めて、研究していただけたら、これから、専門家になる看護職の方にとっても、役に立つのではないのでしょうか？

研究テーマを分析テーマに絞り込んでいくという作業を、さらに綿密にしていって、明らかにしたいことをはっきりと自覚して、インタビューガイドを作成し、インタビューに臨んでいくようにしてください。そうすることによって、よりよいデータをとることができるのではないかと思います。

今年中には「研究発表」という形でまた、M-GTA 研究会で、発表できますよう、応援しています。

◇近況報告：私の研究

中川真美（小平市教育相談室）

皆さま、初めまして。私は現在、公立の教育相談室、公立中学校、精神科クリニックで、カウンセラーとして勤務しています。

私は、2009 年度に参加させていただいた山崎浩司先生の「死生学に活かす質的研究法」の授業で M-GTA に出会い、もっと学びたいと思い、本研究会に入会させていただきました。大規模な研究会であることに驚き、M-GTA を活用して研究しておられる方がこんなにいるんだ！と心強く思いました。2009 年度に 2 回ほど研究会、発表会に参加させていただきました。

た。2010 年度からは、勤務先が増えたこともあり、土曜日の研究会になかなか参加できず、毎号の NL で研究会のディスカッションの内容を楽しみに読んで勉強させていただいています。

私は修士論文で、ペットを亡くした際の悲嘆のプロセスについてインタビューを行って GTA で分析を行いました。が、方法論をよく理解できていないまま提出締切が迫り、概念「もどき」のようなものを並べた結果におわり、不快感が残っていました。山崎先生の授業で M-GTA と出会ったのはその 3 年後だったのですが、切片化を採用しない理由や grounded on data の原則を守るために分析ワークシートを活用するなどの分析の考え方に非常に魅力を感じました。私が今取り組んでいる研究テーマは、「小動物臨床分野の獣医師が体験している葛藤や困難に対して、どのような援助が必要なのか検討する」ことです。ペットが「家族の一員」と認識され、動物医療の進歩もめざましい今日、獣医師側のメンタルヘルスに焦点を当てた取り組みが必要なのではないかと考え、このテーマを設定しました。現在、7 名の獣医師さんにインタビューし逐語録を作成して、分析を試みているところですが、分析テーマの絞り込みに苦労しています。漠然とした分析テーマだと自分は何を明らかにしようとしているのか分からなくなってきて、具体的なものに修正するとデータとのずれが生じる、ということの繰り返しで、データを見ながら考える日々です。また、思考を言語化するということが難しく、理論的メモなどを書くのにとっても苦労しています。遅々とした進み具合ですが、なんとか形になるように頑張りたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

.....

長山豊（金沢大学大学院医学系研究科 博士後期課程）

私は大学病院の精神科病棟に看護師として勤務しています。修士課程在学中に MGTA 研究会で発表させて頂いて以来、様々な領域の先生方に大変お世話になっております。研究会の度に（特に懇親会にて）、様々な刺激を受け、現在取り組んでいる仕事や研究に「よし頑張ろう！」とやる気を再燃させてもらっています。

現在、博士後期課程にて「保護室を長期使用している精神疾患患者に対する看護援助プロセス」を研究テーマに、データ収集を行っております。精神疾患を抱えた患者さんが症状の不安定さにより衝動的に自身や他者に被害を与える可能性がある場合に、保護観察室という医療的に配慮された部屋で隔離されるケースがあります。修士課程では、隔離の導入から解除にかけての看護師の判断と介入に焦点を当て MGTA で分析を行いました。今回は、隔離解除が困難な患者さんに対して、経験豊富なベテラン看護師が隔離解除へつなげるためにどのように介入を展開しているか明らかにしたいと考えています。

しかし、データ収集直前に、ある病棟の師長さんから「私達は常に解除を意識して関わっている訳でない。その人の生活を守る環境として保護室が存在している部分がある。隔

離されていようが、いまいが、その人の病状や生活が安定して過ごせるよう関わっている」と率直な意見を頂きました。この発言を聞いて、普段自分の職場で「隔離解除を推し進めよう」という意識が強すぎるあまりに、冷静な目で研究対象フィールドで生じている現象に目を向けていない事に気づきました。これは、修士課程で MGTA 研究会にて「あなたの思いが分析に強く影響しすぎている」と指摘された事と共通しています。研究対象フィールドに入らせていただき、患者さんにあの手この手でアプローチしている対象者の方々の看護のあり様に感銘を受けながら、ぜひこのデータを十分に活かせるよう、熱い気持ちを持ちながら冷静な視点で分析を進めていきたいと思っています。

◇編集後記

・5月の総会における承認を経て、ニューズレターの編集長が私から竹下さんに交代しました。これまでもニューズレター全体の構成を一からやってくださっていたのは竹下さんであつたことからすると、以前から実質的な編集長は竹下さんだったので、名実ともに編集長にご就任いただいたというわけです。名ばかりの編集長であつた私は、お役御免になって胸をなでおろしております。皆さん、ハードワーキングな竹下編集長を盛り立ててまいりましょう！（つまり、編集長から執筆依頼があつたら断らないでください!?!?）（山崎）

・ひさしぶりに懇親会に出席ができ、大変、楽しい時間を持つことができました。いろいろな方との会話に、数時間があつという間でしたし、その中から、学ぶことも多くありました。みなさんも、ぜひ、懇親会にも参加ください。木下先生とも、“さし”で、相談できますよ。（林）

・この春から熊本の大学に赴任しました。大学は熊本市街から近いにもかかわらず蛍舞う田園地帯で、お城も近いレトロな地域に住み、水も食べ物もお酒もすべて大満足です。天草や阿蘇など海にも山にも恵まれた熊本へぜひお越しください。事務局業務は都丸さんと三輪さんに、NL 編集長も竹下さんに交代して肩の荷がおりた感じです。ところで竹下編集長が「近況報告」執筆になかなかご協力いただけないと悲しんでおります。会が大きくなっていくにしたがってメンバーシップ意識もやや低下している気がします。研究会は論文化のための相互扶助を目的としており各委員もボランティア精神を発揮して頑張っています。みなさんもまずは「近況報告」などから研究会に貢献していただきたく、ご協力のほどよろしくお願いします。（佐川）

・このところ、「暑いなあ。天候が異変するとかして、東京でも軽井沢みたいに涼しくならないかなあ…」と毎日ブツブツ思ってたら、ここ数日嘘のように涼しくなって、嬉しいやらびっくりやら。皆さんも、だいぶ研究が進まれたのではないのでしょうか(?)。このままこの調子で続いてくれると良いのですが、やっぱりそうもいきませんよね…。さて、お待たせいたしました。NL55 号をお届けさせていただきます。今回の研究発表では、熟達者による指導に関するご報告を頂いています。研究領域は違っても、実践ではどの現場でも必ず直面するテーマなので、皆様の研究にダイレクトに役立つレファレンスとなれば幸いです。ご寄稿頂いた皆様、ほんとうに有難うございました。それでは、どうぞ宜しくお願い申し上げます。(竹下)

2011 年度

実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)研究会

総会

2011 年 5 月 28 日

代表 挨拶

第 1 号議案 2010 年度事業報告

1. 定例研究会を 4 回開催した。
2. 第一回 M-GTA 研究会・合同研究会を、西日本、北海道、九州の M-GTA 研究会との共催により、川崎医療福祉大学にて 8 月 28 日・29 日に開催した。
3. 世話人会メンバーを中心に委員会を組織し活動を行った。
4. ホームページ管理委員会により、研究会の HP を更新・管理した。その実務を株式会社マイ・ビジネスサービスに継続委託した。
5. 会員提供の M-GTA 論文を PDF 化して HP の会員専用ページに載せた。
6. ニュースレター編集委員会により、ニュースレター(No. 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53 号)を発行した。
7. 2010 年度会員名簿を発行した。
8. 会員管理業務を、有限会社セクレタリー・オフィス・サービスに委託した。

第 2 号議案 2010 度会計報告

〈一般会計〉

項 目		予算	決算（円）	増減	備考
収入	繰 越 金	579,535	579,535	0	
	会費	750,000	999,000	増 249,000	予算 250 名、実績 333 人分
	資料代	50,000	43,000	減 7,000	見学参加資料代、43 人
	利子	0	234	増 234	
収 入 計		1,379,535	1,621,769	増 242,234	
支出	事務委託	会員・ML 管理費	255,780	増 96,505	
		データ移行費関係	31,500		
		郵送費、発送手数料	47,320		
		振込手数料	17,860		
		印刷費	23,625		
		雑費	420		
		計	376,505		
	会議費		50,000	増 6,715	
	事務費		50,000	減 19,431	
	事務局アルバイト		50,000	増 70,000	
	NL 編集委員活動費		50,000	減 8,815	
	研究委員会活動費		80,000	減 48,149	
	HP 事業		170,000	減 38,080	HP 更新
	合同研究会補助		150,000	0	
	予備費		399,535	減 299,115	北海道 M-GTA 研究会設立補助
	九州研究会設立補助		100,000	0	
支 出 計		1,379,535	1,139,165	減 240,370	
収支			482,604		繰越 482,604

＜特別会計Ⅱ：合同研究会＞

項目	収入	支出	収支	備考
研究会参加費	381,000			3000 円、127 人分
交流会参加費	445,500			5000 円（懇親会費）+500 円（バス代）、81 人分
補助金	150,000			
懇親会費		450,000		5000 円×90 人
バス代金		37,800		
備品		10,834		名札、テープ、ゴミ袋など
人件費		20,000		10000 円×2 人
郵送費		2,220		
弁当、お茶		25,996		
振込用紙・領収書 発送料		13,520		
発送手数料		47,145		発送、領収書作成、参加者確認
同封文書 印刷(B/W)		4,579		B/W、カラー
振込手数料		925		
テープ起こし		17,370		反省会テープ起こし
会議費		25,611		
	976,500	656,000	320,500	繰越 320,500

監査報告

第 3 号議案 規約改正 （資料別紙）

第 4 号議案 2011 年度活動方針

1. 定例研究会を 4 回開催する。
2. 第四回修論報告会を 7 月に東京大学で開催する。
3. 質的心理学会との共催で共同研究会を仙台で 11 月に開催する。
4. 世話人会メンバーを中心に委員会を組織して、活動を行う。
5. 研究会の HP を更新・管理する。その実務を株式会社マイ・ビジネスサービスに継続委託する。
6. 会員提供の M-GTA 論文を PDF 化して HP の会員専用ページに載せる。
7. ニュースレターを定期的に発行する。
8. 2011 年度の会員名簿を発行する。
9. 会員管理業務を、有限会社セクレタリー・オフィス・サービスに継続委託する。
10. M-GTA : SV ガイドラインを完成させるため、作業チームをおく。
11. 2012 年度の合同大会に向け準備委員会を設置する。

第 5 号議案 2011 年度予算計画

〈一般会計〉

収入		支出	備考	
前年度繰越金	482,604	会議費	80,000	世話人会会合費
会費（350 名分 × 3000 円） 非会員参加費 （延 50 名 × 1000 円／回）	1,050,000	事務費	50,000	事務局備品・事務用品・コピー代
		事務局アルバイト代	120,000	研究会等の受付・会場係、事務
		NL 編集委員会活動費	80,000	会議費
		研究委員会活動費	80,000	会議費
	50,000	HP 事業	180,000	HP 更新・管理費、会議費
		会員管理業務	380,000	名簿・ML 管理、会費請求
		共同研究会分担費*	100,000	質的心理学会と同額負担
		予備費	512,604	
計	1,582,604	計	1,582,604	

* 資料参照

〈特別会計Ⅰ：公開研究会〉

2011 年度は実施しないため、繰越額 208,002 円は 2012 年度へ繰越。

〈特別会計Ⅱ：合同研究会〉

2011 度は実施しないため、繰越額 320,500 円は 2012 年度へ繰越。

第 6 号議案 世話人会、事務局および委員会の構成

1. 会長（新規） 小倉啓子

2. 世話人会

（継続）都丸けい子、三輪久美子、水戸美津子、木下康仁、小嶋章吾、佐川佳南枝
坂本智代枝、阿部正子、林葉子、山崎浩司、塚原節子、竹下浩

3. 事務局

事務局長 木下康仁

事務局 都丸けい子、三輪久美子

4. 監事 標美奈子

5. 委員会

- ・ ニュースレター／ホームページ委員会 竹下(責任者)、山崎、林(葉)、佐川
- ・ 研究委員会(大会準備) 山崎(責任者)、阿部(正)、小嶋、坂本
- ・ 定例研究会担当 木下(責任者)、林(葉)、水戸、塚原
- ・ SVガイドライン・チーム 竹下(責任者)、林(葉)、山崎、佐川

以上

実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)研究会 会則

(名称)

第1条 本会は実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 研究会と称する。

本会の事務局は下記の住所におく。

住所 〒171-8501

東京都豊島区西池袋 3-34-1

立教大学 社会学部 木下(康仁)研究室内

実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ研究会

代表 小倉啓子

電話番号 03-3985-2310

(目的)

第2条 本会は、以下を目的とする研究会である

1. 質的研究法、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の理論と方法を学習する
2. M-GTA を用いてデータの分析を行い、論文にまとめていくまでを相互にサポートする
3. 研究結果の実践的活用を推進する

(事業)

第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。なお、事業年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

1. 研究例会の開催
2. 公開研究会の開催
3. その他本会の目的達成に必要な事業
4. 総会の開催

(会員)

第4条 本会の会員は、本会の目的に賛同する者で、第6条、第7条の条件に同意する者とする。

第5条 会員数 約330名 (2011年5月現在)

第6条 会員は、所定の会費(年会費 3000円)を納めるものとする。ただし、既納の会費は、全てこれを返納しない。

第7条 会員は学習の成果を研究論文として発表するものとする。

第8条 退会を希望する会員は、その旨をすみやかに事務局まで連絡する。また、第4条が履行されない場合には事務局は退会処分をとることができる。

第9条 本会に名誉会員をおくことができる。名誉会員は本会の活動に顕著な貢献をした会員とし、以後年会費の納入が免除される

(組織)

第10条 本会には次の役員を置く。

1. 代表 1名 氏名 小倉啓子
2. 世話人 若干名
3. 事務局 若干名
4. 監事 若干名

第 11 条 会務の運営は次の通りとする。

1. 会長は、本会を代表し会務を総括する。会長は、世話人会から互選される。
2. 世話人は、世話人会を組織し、本会の事業の推進にあたる。世話人会は本会の円滑な運営のために必要な措置をとることができる。
3. 事務局は、庶務、会計、その他の会務を分掌する。事務局長は、世話人会から互選される。

第 11 条 本会の経費は、会費をもって当てる。なお、会計年度は、毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日までとする。

(改廃)

第 12 条 本規則の改廃は、総会の承認を経て行う。

附則

1. 設立年月日 1999 年 12 月 12 日
2. 本会則の変更は、2011 年 05 月 28 日より施行する。

共 同 研 究 会

「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)

の視座——質的心理学と相互作用論の立場から」

1. 概要: M-GTA や質的心理学を含む質的研究に関心のある研究者の新規発掘とネットワーク拡大を目的に、共同研究会を行う。M-GTA 研究会および日本質的心理学会が共に強固な基盤をもたない東北地方において、現地で地道に質的研究を展開してきた東北大学「質的分析」研究会と連携し、M-GTA の視座について質的心理学と相互作用論の立場から考え、方法論的理解を深める。
2. 日時: 2011 年 11 月 12 日(土) 午後 13:00～17:00(4 時間)
3. 会場: 宮城県仙台市内で調整中
4. 共催: 実践的グラウンデッド・セオリー(M-GTA)研究会
日本質的心理学会 研究交流委員会
協賛: 東北大学「質的分析」研究会
5. 内容: テーマ:「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の視座——質的心理学と相互作用論の立場から」
13:00-13:10 開会の挨拶・趣旨説明
13:10-13:55 基調講演Ⅰ: 小倉啓子先生(ヤマザキ学園大学・臨床心理学)
13:55-14:40 基調講演Ⅱ: 徳川直人先生(東北大学・社会学)
14:50-16:50 セッション「分析の実際」: 3 名(データ提供者* 1 名+Sv2 名)
16:50-17:00 閉会の挨拶
6. 備考:
 - ① 企画担当の山崎世話人は日本質的心理学会(質心)の研究交流委員会に属しており、小倉先生は同学会の編集委員会に属している。
 - ② 東北大学の徳川直人先生(社会学、相互作用論、「質的分析」研究会)に協賛をご承諾いただいた。
 - ③ 質的心理学との絡みで小倉先生、相互作用論との絡みで徳川先生が、それぞれ基調講演者として適任と思われる。
 - ④ 質心研究交流委員会から 10 万円、M-GTA 研究会から 10 万円の予算。施設利用料、M-GTA 研究会登壇者旅費: ¥120,000(一律 ¥30,000×4 名)、外部演者謝礼: ¥20,000 等。

以上

* 博論レベルの M-GTA 研究会会員